

の月夜春陽

# 人秋輝輝



大平輝

久我之助

正太郎

龍馬

時子

## 文楽荘

# 乍憚口上

櫻花満開のよろしき季節と相成申候處市中皆々様には銚後の御つとめも忙しくいよ／＼御盛榮の條奉大賀候

緒而當座に於ては更に大飛躍の機會に至り茲に陽春本格大興行として秘藏の名狂言を配列いたし殊には當座兩巨頭が精魂を傾くる大舞臺を開きて文樂藝術の極致を御尊覽に供するを始めとし又國策文化の一面を擔ひて當座獨得の新趣向に成る新曲を御鑑賞を願ふ等全座員舉つて大活躍を爲し郷土藝術本來の使命を充分に發揮いたすべき筈に御座候間出勤太夫三味線人形連中の熱意を御諒察被下度尙又此度竹本津の子太夫儀は竹本濱太夫と改名仕り此上とも精勵致候間一層御鞭撻を賜り度而して當興行相變らず賑々敷御來場御批判を賜り度此段伏して奉懇願候

昭和十六年四月一日

四ッ橋畔

文樂座 敬白

昭和十六年四月一日初日

初日午後二時開演  
毎日午後三時開演

・御觀覽料・

一等席 御一名 金三圓五十錢

(二階座席三十錢上り)

二等席 御一名 金一圓五十錢

三等席 御一名 金六 十 錢

(各等入場税別)

一等御座席  
一等椅子席) は五日前より

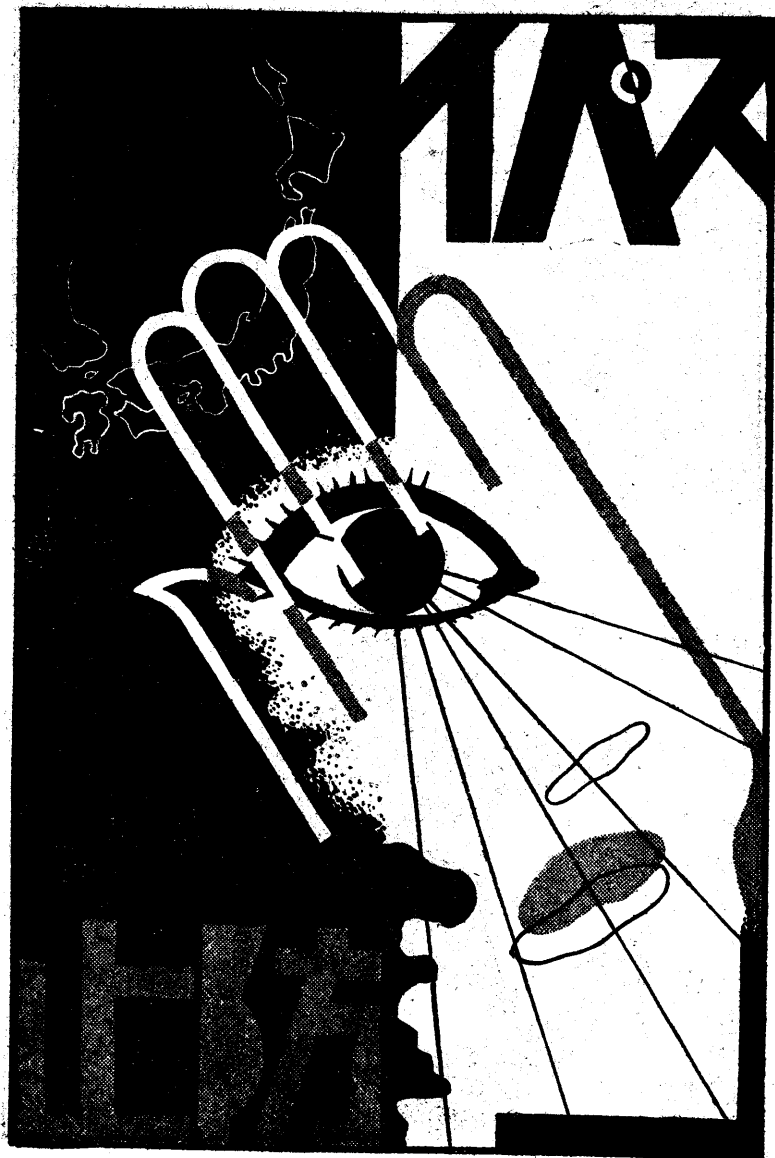
前賣切符發賣致居候

前賣切符  
專用電話 南 76 四七壹番

一般御用  
電話 南 76 三〇三番  
三七八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますから御便利で御座ゐます。

公奉域職・踐實道臣



國民精神總動員

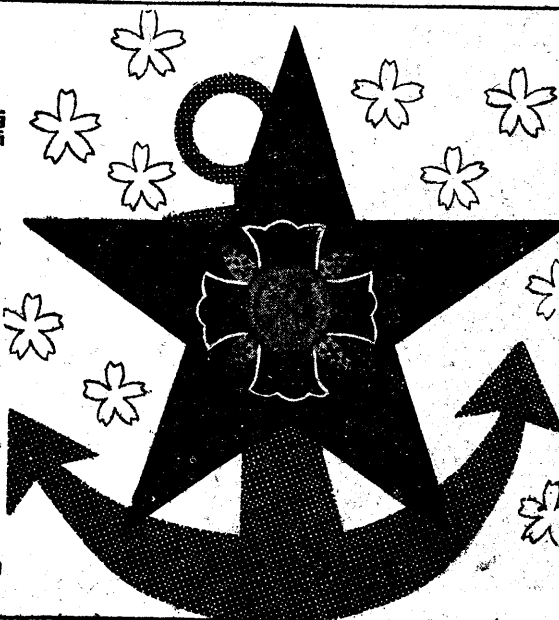
忠貞報國

舉國一致

堅忍持久



國を護つた傷兵護れ



傷兵保護院  
國民精神總動員中央聯盟

# 陽春四月の 人形浄瑠璃

演出總形人・線味三・夫太

四月一日初日

初日午後二時開演  
毎日午後三時開演

第一

丁東詞庵作  
義澤友次郎作曲  
外傳士馬方

丑五郎  
三島驛より講釋場まで

第二

菅原傳授

松王首實驗の段  
手習鑑

第三

増補大

展り橋の段  
江山

第四

妹脊山婦

妹脊山の段  
女庭訓

第五

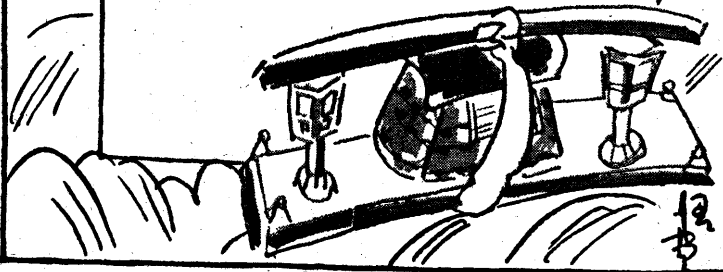
梅兵衛川戀飛脚

新口村の段  
大和往來

第六

西村若菜亭作詞付  
里上げしき大塚

下巻の二演  
双草紙  
禿鳥







14

## 三島驛訛證文より講釋場の段

馬方丑五郎

神崎與五郎

茶店の婆

瀬古六太夫

講  
釋  
師

ツレ

|    |    |    |    |    |    |    |
|----|----|----|----|----|----|----|
| 鶴野 | 野豐 | 竹竹 | 豐豐 | 豐豐 | 豐豐 | 竹竹 |
| 澤澤 | 澤澤 | 本本 | 竹竹 | 竹竹 | 竹竹 | 本本 |
| 友吉 | 吉新 | 播長 | 富伊 | 駒千 | 呂和 | 相文 |
|    | 五左 | 路尾 | 勢太 | 若駒 | 泉太 | 生字 |
| 作左 | 郎門 | 夫夫 | 夫夫 | 夫夫 | 夫夫 | 夫夫 |

丁東詞庵  
鶴澤友次郎作曲

外義  
傳士  
馬うま  
方かた  
丑うし  
五ご  
郎ろう

三島驛詮證文より  
本陣講釋場の段

本曲は昭和十一年十一月興行に始めて文樂座に上場された新作淨瑠璃で鶴澤友次郎が作曲したもの。この度が第二回目の上演である。

三島驛立場茶屋にて宿場の無賴漢馬方丑五郎が赤穂の浪士神崎與五郎に難題を吹きかけ詫言證文を取つたが、與五郎は大事を控へる身とて丑五郎の辱しめを耐へ忍ぶ。其後本陣に催された講釋を聽いて丑五郎は始めて與五郎の素性を知り、懺然として悔悟し頭を丸めて與五郎の跡を弔ふと云ふ筋である。

(床本) 三島驛より講釋場の段

り、大石良雄がはからひとあづまに下る神崎與五郎、

人形役割割

三島驛詫證文より講釋場の段

|       |       |
|-------|-------|
| 馬方丑五郎 | 吉田玉藏  |
| 茶店の婆  | 桐竹政龜  |
| 神崎與五郎 | 吉田光之助 |
| 旅の女   | 桐竹紋司  |
| 飛脚屋   | 吉田多三郎 |
| 瀬古六太夫 | 吉田小兵吉 |
| 講釋師   | 吉田玉市  |

不慮の最後をとげられし、主君のかたきかたときも、わすれがたなのつか袋、旅にあればつゝしみのどまりかさぬる枕にも、吉良上野の首あげし、夢のさいさき吉原や、沼津もすぎていつしかど、こゝは三島の宿はづれ、甘酒茶屋のおもてのかた、ゆるせ、暫く休息と入る店先お出でなさりませ、お疲れでござりましょ、早速ながらお茶一つ名物の甘酒もござります、お宗旨ちがひなら極上のもろはく、お肴には蕎麦のてりやき鳥の吸物、古わらんじの馬糞あえまで、何でも用意いたしますと、口がる氣がなるな茶店婆、賣るあいきやうに思はずも、心の紐も打ちとけて、ア、いや氣をつかうてくりやるな、みどもの所望は濃茶一ばい出花の色が望ましやと床几に腰掛け目のあたり、開けし海や三保ヶ崎、つゞく翠は松原の松といふだに思ひ出す、うらみは深き松の間や、つきせぬ君が妄執を、晴らしまつるも今暫し、口にuscitaねど氣は勇み、立つや鳴のむれ／＼て、沖をゆきまのま帆かた帆、ながむるわが身の末は、いづれ生命をすて小舟、つひにかへらぬ旅路ぞと、思へば名ごりおしまれて、見かへるそらにふじの嶺、雪のすがたのけだかさよ、とて



心地よきながめやとあかず見守る耳元に「いやな風にも  
 ヨなびかんせド、吉田通れば二階からまねくしかも  
 ナア鹿の子のふり袖」モシ／＼お侍様ちと頼まれて下ん  
 せ、そちは何者ぢや何者とは御見かけ通り、至つてぢぢ  
 むながさつ者、渡世は馬方名は馬喰ひの丑五郎といふて  
 この界限ではちつとばかりうれた男でござんすわい、ム、  
 シテ其馬方の丑五郎がそれがしに何の用、へ、何の用と  
 は知れたことぢや馬方が厩賣りに出たためしもなければ  
 甘酒商ふた話もきかず、馬方の方は大がい知れた馬の事  
 旦那乗つて下んせ、なに馬にのれか、折角ながら用はな  
 い、みどもは生來馬がきらひぢや、ナニ馬がきらい、ハ  
 テナ、武士ともあらうものが馬がきらいとは、ムンなる  
 ほどなア、見うけるところ生白い糸瓜のやうなよい男、  
 びなりしやなりの物腰は、役者のやうな、へ、へ、へ、  
 ナアソレ役者のやうな優男、それで馬が怖いとはヤ、コ  
 リヤお道理、お道理そんなら馬が怖けりや駕にさんせ、  
 唐天竺まで居ねむりして行ける、よい駕屋をおれがせわ  
 するほどに、ドレちよつと待つてゐさんせ、あこれまち  
 やれ、みどもは馬もいやなら駕もきらい、親から貰ふた



この足が何よりすきな乗物ぞと、とりあひもせぬ與五郎に、なほからみつゝ丑五郎、ムンそれほどきらいなものなら、むりにすゝめはせぬがその代り、ナア旦那、酒手はしつかり頼みます、これは異な事、のりもせぬ馬や駕に酒手出すとは開關以來ない作法、オットさうはにがさぬぞ、モシお武士、イヤサ親方、もうよいかげんに頭巾をぬがんせ、ナ、何と申す、へ、へ、何ぼかくしてもあがぬ事ぢや、コレわりやアノ白粉くさい役者であらうがな、ナニみどもが役者とはハ、ハ、ハ、ハ、いかに酒きげんとはいひながら、武骨者のそれがしを人もあらうに役者とは、あつばれそちも筋で、大分損を致したそうな、何ぢや筋で損をしたとは、簀をにらむと云ふことか、その言ひ草からが役者の本性、ヤイこの丑五郎を見損ふた二年三百六十日東海道の上り下り何萬人の往來を對手にくらす渡世人ぢや、おのれが何ぼ武士がつても、一目でぢやんと見抜いたわ、上方役者の江戸下り道中宿場の馬方や、雪助どもにたかれて、酒手ねだりがうるさい故お手のものゝ舞臺姿で、胡麻化して通らうとは。へ、さう安うは問屋が卸さぬわ、悪いことは云はぬ、出すもの

は出して通らんせ、えゝ、いやかいのゝ、侍早よう出せゝこれほど言ふても返事せぬは不承ぢやナ、よいわゝ此上はおれもいぢづく出さすわ、こうして出さすのぢやと、ふしくれ立ちし腕まくり、拳をかため與五郎の横髪めがけて打おろすをハツとかわして一足すさり無禮者めと、にらみつれば、ヤイゝ洒落たまねさらすない、何ぢや刀の柄に手をかけて、フム、俺を斬る氣かコリヤ面白い、斬つて貰はうかい、手からなりと足からなりと、さア斬れ、斬りさらせとむんずと座したる不敵面、茶店の婆は肝を消し、コレサ丑五郎何をするのぢやなんぼ酔うてゐるとは云へ、かりにも二本さしたお武士さまに無禮があつてはためにならぬ、サ、立ちやゝと引立つる手を振り拂ひやかましいやい、二本さしたが怖ふて焼豆腐が喰へるかい、二本はおろか何本さいても、タカが竹の串の金具張、斬つて赤い血が出るか出ぬか代は見てのお戻りぢや、お戻りぢや、ナ、なんぢやなんぢな何をびくびくさらすのぢや、さア斬れ斬れ、おのれ斬りさらさぬか、さてもど性根のない青瓢箪、こんな喰へと與五郎の、顔をめがけてカアブウカツと痰を吐きか



ちいで行くあと見送る與五郎、西と東に別れゆく、はや一年をすぎの戸の、あけて元祿十五年極月中の十四日、播洲赤穂の浪人、四十七士が討入りとて、世上の汐汰もわきかへる、名も高輪の泉岳寺、これこそ武士の鑑よと津々浦々にひびきける。

三島の宿の本陣にて、瀬古六太夫が奥座敷、けふしも人々うちよいて聞耳立つる義士の働き、語るは赤松龍山とて、江戸よりのぼりし講釋師、懸河の辯のよどみなく眼に見る如く語り出す龍山扇斜にかまへ、ア、各々様には毎夜の御入來有難き仕合せ、赤松龍山高座ながら御禮を申上ます、サテ連夜讀つゞけましたる義士の仇討、彌々今晚を以つて讀切りと致しますれば、ゆるゝとお聴き濟の程を願つて置きます、扱て昨晚のつゞき播州赤穂の浪士太石内藏助良雄を始め義士の面々主君の仇を報はんと、いろは四十八文字の印をつけ、火事装束に身をかため、まんじ巴と降りしきる雪の夜道を嫌ひなく、隊をとゝのへタツゝゝゝゝゝに到着したる吉良の邸、裏と表に引別れ難なく門を打開き、山川の相言葉山鹿流の陣太鼓を打ならし、我も我もと込入つたり日頃のうつ

ぶん吉良上野の首級を上んと四十餘人阿修羅の如き働きの中にも一際目立しは神崎與五郎則保と聲高らかに呼はる時、きゝ手の中より頓狂聲、先生まつたゝと飛出せば瀬古六太夫びつくりし、何ぢやゝゝゝ、そちは馬方丑五郎ではないか、折角面白い正念場をとめるとは何事、ア、いやきゝ捨てならぬ今の名前、かんざけよかろとわ云はなんだか先生、モ一度いふて下され、頼みますゝゝ、赤松龍山吹き出し、アハゝゝ、これは又滅想な事、かんざけよかろではござらぬ、神崎與五郎則保、ナニ神崎與五郎とは、ハテ聞いたやうなと、財布の中よりとり出すよつてくだんの一札を、つくゞゝ見入る丑五郎、俄かにわつと泣き出せば、人々驚きこりやどうぢや、暴れ者の丑めが泣き出し居つた、何事ならむと立騒ぐ、エゝ、知らなんだゝゝゝゝゝ、そんな忠義なお方とわ知らねえで忘れもせん去年の秋、甘酒茶屋の店先で無理難題を吹きかけて、五兩の金に詔證文まで出させたわ、何と云ふ罰當り、よふこの口がゆがまなんだ、虫けらのような此おれを、お手打ちにもなされぬわ、斯いふ大望あらばこそよふ勘忍なされました、神崎様、與五郎様赦して下され

く、えゝ恐ろしい外道よと、疊にくひつきくやみ泣き  
さすがに人々慰めかね、目と目を見合すばかりなり、丑  
五郎起ち上り、おゝそうぢや、このお詫びにはまづこの  
通り御免なされと目の前にゐあはす赤松龍山が、腰なる  
小刀ぬきとれば龍山驚きひつとらへ、こりや危いどうす  
ると、とめてもとまらぬ馬方のはづむ力にはねとばされ  
あなやと云ふまに丑五郎、己がもとどりつかみあげ、ふ  
つゝと切てなげ出す、やアこれはと人々驚けば皆さん誤  
りましたく、命を捨て主人の敵吉良上野をお討なされ  
た忠義の咄しを聞きまし、悪黨の丑五郎も今日からふつ  
ゝり改心して、神崎様の跡弔ひ此一生を庵室にすみの衣  
や珠數の玉くりかへし行東路や三島の宿に神崎が詫び證  
文の一説を爰に残るも久しけれ。





松王丸首實驗の段

菅原傳授手習鑑

松王丸首實驗の段

|    |      |
|----|------|
| 後  | 前    |
| 豊豊 | 野竹豊竹 |
| 澤竹 | 澤本澤本 |
| 仙呂 | 吉相新文 |
| 太  | 生左字  |
| 糸夫 | 五太衛太 |
|    | 郎夫門夫 |

本曲は延享三年八月廿一日（二四〇六）より大阪竹本座に上演、作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛。全五段よりなり、殊にこの第四段目切「寺子屋の段」が有名である。大近松作「天神記」を原據として時平の横暴非道、道眞の冤罪左遷の史實に基き、梅・櫻・松の三つ子兄弟を錯綜させて、巧みに忠義、恩愛、犠牲、感激、同情などを高調し、麗はしい文章で書かれた「忠臣蔵」、「千本櫻」などと並んで淨瑠璃作品中の代表的名作である。（尚、詳細は當座二月興行番附の解題を御参照下さい。）

梗概

へ一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、教へる人に習ふ子の中に交はる菅秀才

## 人形役割

松王丸首實驗の段

|   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 手 | 百 | 取 | 御 | 春 | 菅 | 一 | よ | 妻 | 武 | 女 | 舍 |
| 習 |   |   | 藤 | 臺 | 秀 | 子 | だ | 部 | 戸 | 房 | 人 |
|   |   |   | 玄 |   | 才 | 小 | れ | 源 | 浪 | 千 | 松 |
| 子 | 姓 | 卷 | 所 | 蕃 | 郎 | 太 | く | 藏 | 代 | 丸 | 王 |
| 大 | 大 | 大 | 桐 | 桐 | 桐 | 吉 | 吉 | 吉 | 吉 | 吉 | 吉 |
|   |   |   | 竹 | 竹 | 竹 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 | 田 |
| ぜ | ぜ | ぜ | 紋 | 紋 | 紋 | 文 | 文 | 文 | 玉 | 五 | 榮 |
|   |   |   | 太 | 門 | 之 | 二 | 郎 | 作 | 藏 | 郎 | 三 |
| い | い | い | 郎 | 造 | 助 | 枝 | 郎 | 作 | 藏 | 郎 | 三 |

芹生の片山里、手習ひ師匠武部源藏夫婦は、丞相の一子菅秀才を我が子に仕立てかくまつてゐた。今日は新しい寺入りの子もあることゝて、妻の戸浪は大勢の寺子たちを勵まして手習をさせて居た。

其處へ、どうやら様子ありげな女房が七つばかりの男の子を連れて訪れた、名前を聞けば小太郎と云つて、菅秀才とは同じ位の年配の賢し氣な子であつた。今日からよろしく、とあるので戸浪はかねて源藏から話のあつた寺入りの子だと悟つた。母親はそゝくさと隣村まで行つて來ると出て行くので、後を追ふ子をなだめつゝ機嫌を取るのであつた。

間もなく外から歸つて來る主の源藏、何時になく顔色も青ざめ、思案の腕組みも不機嫌に、出迎への寺子等を、づゝと見渡したが、いづれを見ても山家育ち、世話甲斐もない役立たず、と思ひあつた。氣に不興な口をきくのだつた。



夫の顔色の悪いのを見てとつた戸浪は、山家育ちは知れてあること、それより機嫌直して約束の寺入りの子を見てやつてくれ、と小太郎を引合はせた。と、いたいけなくも手をついて挨拶をする小太郎の顔をじつと見つめた源藏は、忽ち顔色も柔いで器量すぐれて氣高い生れつき、公卿高家の子息と云つてもおそろく恥かしからず、ハテ扱、そなたはよい子ぢやなア、と喜ばしげにほゝゑんだ。

合點の行かぬ夫の様子に、子供たちを奥へやつて、戸浪は源三に今日の仔細を尋ねた。

仔細と云ふのはかく／＼であつた。今日村の饗應と云つて呼ばれて行つたのは偽りで、庄屋方へ行つてみると、時平の家來春藤玄蕃に病體ながら松王丸が檢分の役として附添ひ、數百人の人數で源藏を取巻き、訴人によつて源藏方に菅秀才がかくまはれてあること明白、直ちに首打つて渡すかさなくば踏み込んで請取らう、と手づめの詰問だ



つた。源藏も是非に及ばず、首打つて渡す、と約束して歸つて來てはみたものゝ、それは誰か寺子の中に身替りに立つものもあるかと思案の揚句、どれもこれも、育ちのよい菅秀才とは似ても似つかぬ子供ばかりで、若君の御運もいよくつぎる日が來たかと慨いてゐたのだつた。すると今日寺入りの小太郎を見れば、満更烏を驚とも云はれぬ器量に、これこそと思ひ當る所があつたのである。戸浪はこれを聞いて、松王は若君の顔をよく見知つて居る筈、と心配し出すのだつたが、若し實と知れた時は松王めを眞二つ、叶はぬ時は若君諸共死出三途の御供せん、と夫が腹を据えるので、夫婦はやがて來る玄蕃、松王を待ち受けることになつた。

やがて門口から横柄に訪ふ春藤玄蕃、首見る役として病體の松王丸が駕籠に乗つて従つて來た。

村の者たちはこの噂さに我が子大事と迎へに來るのを、玄蕃は一々呼び出し子供の顔を檢分して歸らせた。

その後、家の中へ入つた二人は、源藏にこの上は寸時も早く若君の首を受取らうと厳しく促すので、源藏は意を決し首桶持つて奥へ入つた。

松王はあたりを見廻して机の敷をしらべ、最前歸つた子供の數より一つ多いと詰るので戸浪は、今日寺入りした子のと云ひかけて口を啣み、これぞ菅秀才のお机文庫、と漸く云ひ抜けた。

奥にはバツタリ首打つ音がして、やがて源藏は白臺に首桶のせて、松王の目通りに据え置いた。

家來たちは下知に従つて、十手を振つて源藏夫婦を取巻くので、源藏は虚と云はば切付けん、忍びの鰐元をくつろげて堅睡を飲んでまちかまへた。

松王が首桶引きよせ蓋を明ければ、首は小太郎ためつすがめつ窺ひ見た末、菅秀才の首に紛れた。

し、と云ひはつたので、檢使の玄蕃は大喜び、褒美にはかくまつた科許して呉れる、と首を提げ、松王はかねての願ひの通り病氣保養の暇を願ふ、とそれ／＼出て行つた。

あとに源藏夫婦は、張りつめた氣もゆるみ、しばしはものも言へぬばかりだつたが、これぞ凡人ならぬ我が君の御聖德によつて松王の眼がかすみ質首を知らず持つて歸つた。と天地に三拜九拜したのだつた。

其處に一難去つて又一難が湧き出でた。それは小太郎の母が歸つて來たのである。立ち騒ぐ戸浪を引退けた源藏は、何くはぬ面持ちで内へ迎へ入れ様子を窺つて後から只一と討ちと切り付けた。

女もしれもの、その太刀をはづしてあり合ふ我が子の文庫ではつしと受け止めた。二つになつた文庫の中からは、ばらばらと出る經帷子に南無阿彌陀佛の六字の幡、源藏はコヘいかにと、進みかねるのを女は、菅秀才のお身替りお役に立てゝ下

さつたか、と意外の言葉、驚いた源藏は、して其許は何人の御内證、と尋ねる折しも、門口から、女房悦べ、倅はお役に立つたぞ、入つて來たのは先程の松王だつた。

松王のことばを聞くよりわつと泣き出した最前の女は、松王の女房千代だつたのである。今まで敵と思つてゐた松王がこの不審な様子に、源藏は威儀を正して所存を尋ねた。

松王は三人兄弟の中、一人はなれて時平の家來になつてしまつた。そして親兄弟とも肉縁を切つて恩ある菅丞相へ敵對しなければならなかつた。これも身の因果とは云ひ乍ら、何とかして主從の縁を切らうと作病までかまへて暇を願つたのだが今日の役目が済むまでと、今日の仕儀に及んだのだ。松王はよもや源藏が若君を打つ様なことはないと信じてゐたけれど、さてその身替りとして誰を、と云ふことになつて、女房千代と相談し、二人の中の一子小太郎を、これに立てたのであつた

これが松王夫婦の丞相へのせめてもの御恩返しだつた。

流石に千代は女の身の心弱く、小太郎に別れた時の事を思ひ出で又泣き伏すのだ。松王はこれを叱つたが、けなげな小太郎の最後の様子を聞き、腸もちぎれる思ひがするのだつた。それにつけても御恩も送らず先立つた弟櫻丸の上を思ひ涙にくれた。

序でながら若君へ御土産、と北嵯峨からお連れしたと云ふ丞相の御臺所を若君に引合はせた。

やがて戸浪が奥から抱いて来る小太郎の死骸を乗物に移し入れ、松王夫婦はかねて用意の白装束となり、源藏夫婦に門火を頼んで野邊の送りに出て立つのであつた。

### (佐和利) 松王丸首實驗の段

と云ふに女房猶せき上げ、草葉のかげで小太郎が、聞いて嬉しう思ひましょ、もつべきものは子なるとは、あ

の子が爲によい手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追ふたを、叱つた時の其悲しさ、冥途の旅へ寺入と早虫がしらせたか、隣村へ行くと云ふて、道までいんで見たれ共、子を殺さしにおこし置いて、どうまあ内へいなるゝものぞ、死顔なりとも今一度見たさに、未練と笑ふて下さんすな、包みし祝儀はあの子が香奠四十九日の蒸物まで持つて寺入さすと云ふ、悲しい事が世にあらうか育ちも生れも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子は媚よしと、美しう生れたが、かわいやその身の不仕合せ、何の因果に痘痘まで、仕舞ふた事ぢやとせき上げてかつばと伏して泣きければ。

アイと返事の其中に、戸浪が心得抱いてくる、死骸を網代の乗物へ、乗せた夫婦が上着をとれば、あはれや内より覺悟の用意下に、白無垢麻上下、心を察して源藏夫婦野邊の送りに親の身で子を送る法はなし、我々夫婦が代らんと立寄れば松王丸、イヤ／＼これは我子にあらず、菅秀才の亡體を御供申す、いづれもは、門火々と門火

をたのみ頼まるゝ、御臺若君諸共に、しやくり上げたる  
御涙、冥土の旅へ寺入りの師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、  
六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く  
子もあへなくも、ちりぬる命是非もなや、あすの夜誰れ  
か添乳せん、らむうゐめ見る親心、劍と死出の山けこえ  
あさきゆめみし心地して、跡は門火にゑひもせず京は故  
郷と立別れ鳥邊野さして連歸る。

上方満十周年記念

# 文 樂 展

● 文樂（人形浄瑠璃）に  
● 關する一資料文獻

會期 四月二十二日 四月二十九日  
會場 高麗橋 三越 三階催場にて

増ぞう補ほ大おほ江え山やま

戻り橋の段



戻り橋の段

渡邊源吾綱  
扇折若菜實ハ惡鬼

|      |      |    |    |    |    |    |    |
|------|------|----|----|----|----|----|----|
| 竹本   | 竹本   | 豊澤 | 鶴澤 | 鶴澤 | 鶴澤 | 野澤 | 野澤 |
| 大隅太夫 | 伊達太夫 | 廣助 | 友衛 | 友衛 | 徳吉 | 龍藏 | 市藏 |

人形役

割

・戻り橋の段

扇折若菜實ハ惡鬼  
渡邊源吾綱

桐竹紋十郎  
吉田玉幸

本曲は元來「大江山酒吞童子」羅生門の段として上場されてゐたのを、明治卅三年春堀江明樂座で始めて現在の如く戻り橋の趣向で上演する事になつたものである。當時、長唄や常磐津で戻り橋は市井に流行してゐたのを人形淨瑠璃の世界にも取り入れることになり、三代團平の節付けで鬼女を伊達時代の故土佐太夫、綱を故大島太夫が語り、幕明きに大薩摩を入れて、これには友松時代の現道八の糸で先頃歿くなつた鍛太夫が語つたと云ふ。愛宕山の鬼女が夜々洛中に現れて人を喰ひ夜は往來の人も絶へると云ふ或る夜、源頼光の四天王の一人渡邊綱が君の使で堀川戻り橋にかゝると扇折若菜と名乗る美女が現れ五條まで綱と道連れになつて呉れと頼む。綱は油斷なく女と連れ立つて戻り橋を渡る時ふと水鏡に映る物凄鬼女の形相、何氣なく女に舞を所望して正體を見とゞけ、名刀髭切丸の威徳で遂に鬼女の片腕を斬り落すと云ふ筋。



(床本) 戻り橋の段

春雨もいつしか晴てしろくと、月照渡る堀川の、はや瀬の流落ち合うて、水音凄き戻橋、扱も渡邊の源吾綱、戻橋へ來たりしが四方はひつそりと静まりて、怪しとみまふ者もなく、むだ足ふみし残念やと、一人つぶやき立居たり、折ふしさつと吹嵐す、風有ぬか岸の柳の騒がじく、心ならねばふりかへり、ハテ心得ぬ今吹き嵐す夜嵐の身にしみくと五體の熱氣、扱は妖魔の仕はざにて、我をおどさん企みよな、いかなる妖魔の術有るとも、それを恐るゝ綱にあらず、イデ妖怪を退治して君へ土産に參らせんイザ來い來れと大太刀引きそばめ、木の下蔭へと忍び入る、又村立ちし雨雲の蔭もる月を夜すがにて、たどる大路に人影も火蔭も見えず、我が影を若しや人かと驚きて、被衣に身をば忍ぶ摺、けふの細布ならずして女心に胸合はず、思ひ惱みて來りける、ア、今宵の空の定めなく、降らぬ内

にと思へども、爰は一條辰橋、見れば行きかふ人もなし  
 ア、便りもなやとたゞずみて、暫し休らひ居たりける、  
 綱は小蔭を立ち出で、ア、イヤ女性は何れへ参られる  
 ぞ、ヲ、これは、お武家様、妾は一條の大宮より五條  
 のわたりへ今宵のうちは是非参らねばならぬ者、女の身で  
 只一人此の物騒な夜の道、怖い、と歩むうち、今のあ  
 なたのお聲にて、ほんに惻り致しました、ホ、怖いと申  
 すは尤なり、五條のわたりへ参るとあらば、ア、幸いの  
 よき道連れ、五條のあたりへ用事も有らば、某送つて遣  
 はそふ、コワお情深い其の仰せ、お詞に従ひますれば、  
 どうぞお連れなされて下さりませ、いざ参らうと打ち連  
 れ立、折しも空の雲晴れて月にあり、小川の流れ、水  
 に映りし異形の姿、綱は目早く今水中に映りし蔭は、エ  
 、ア、イヤ夜更けぬ内に早く、と、西へ廻りし月の  
 輪に、遠くはなれて愛宕山、北野は近く清瀧の森は此方  
 とふりかへり、見上る顔にはら、と、木々の雫も雲運  
 ぶ、又も雨かと立ち休らひ、綱は女をいたはりて歩み行  
 く、馴れぬ夜道にてさぞ草臥れし事ならん、イエ、妾  
 よりあなたこそ、足弱をお連れなされて定めしお草

臥れでござりませう、ナニサナニサ最前より見受けし處  
 ハテ麗かなおことが姿、連れ立つ道に馴れやすく、今は  
 隔ても中空の朧も春の名残とや、都人とは云ひながら、  
 いとも優しき形風俗、いなことをたづねれども、おん身  
 が父は何人なるぞ、父は五條の扇折、常々舞を好みし故  
 妾も幼き頃よりして教へを受けしが身の徳にて、此程も  
 或る御所にお宮仕へを致しました、ホ、さも有らん、  
 恥かしながら某は、未だ舞を見たることなし、一トさし  
 舞を見せられまいか、お送り下さる其御禮に只今御覽に  
 入れませうが、何を申すも途中のこと、拙なき技とお叱  
 りは、モ只幾重にもと一禮し、女性は扇借り受けて、會  
 釋をこぼし進み出で、空も霞みて八重一重、櫻狩する諸  
 人が、群つゝ爰へ清水や、初瀬の山に雪と見じ、花の散  
 り行く嵐山、惜しむ別れの春過ぎて、夏の初めにおくれ  
 にし、花も青葉に衣更へ、木々の翠の美しや、テサテ面  
 白き事なりしぞ、かゝる伎藝のある者を妻に持ちなばよ  
 き樂しみ、春の夜道に結ぶ縁、解くか解かぬかおことが  
 心只一ツ、コレサどうか、と寄り添へば、女ははつと  
 袖覆ひ、お戯れとは知りながら、嘘にも嬉しいその仰せ

定めて貴方は奥様をお持ちなされてござりませふ、ア、イヤ、未だ妻はめとらぬが、見らるゝ通りの武骨者、誰れも妻になり人がない、なんのまアない事がござりませふ、まさゝとしたそのお顔、お情深きお心に、今宵見へし妾さへ、縁を結ぶ露もがな、思ふ戀路の初螢、云ひ出しかねて胸こがし、若葉の闇に迷ふもの、都女郎は取分けて、姿優しき花菖蒲、引きつ引かれつ澤水に、袖も濡にし事やらん、こなたは尙もうち解けて、それは御身の思ひ違ひかゝる名もなき田舎武士、思ひをかける者があらうか、イエ、知つて居ります立派なお名前、ム、何立派な名前とは、當時内裏を守りの役、都へ上りし頼光朝臣の御内にて、渡邊源吾綱どのと、ム、如何致して我が名をば、サア戀しと思ふ殿御故、とくより存じて居ります、戀しく思ふと云ふは偽り、御身が我が名を存ぜしは妖魔の術で有ふがな、ムヲホ、、、、又恠りさそふと思ふて、アノマア眞顔で、コレ申し御覽の通り私は若菜、エ、、、、、しくもぬかしたり、汝は心づかざりしが最前これへ來る道すぢ、月の光に有りゝと水に映りし鬼形の姿、なんとハ、、、、、媚よき女に化ける

共、其本性は惡鬼ならん、ム、サア斯く見ぬきし上からは其本性を現はすか、サア君より賜はる此御太刀、髭切丸の利劍の切味、すみやかに降伏さそうか、サア、サアサア、サア、サア、サア、サア、源の頼光が家臣渡邊の源吾綱が向ふたり、變化の正體現はせよと、柄に手をかけ詰めかけたり、此方の妖女は忽ちに、憤怒の相を現はして、次第々々に變ずる姿、眼いからし大音聲、我は愛宕の山奥に幾年住みし惡鬼也、斯く見現はされし上からは我が隠れ家へ連れ行きて、引き裂きくれんいざ來いと、云ふより早く飛びかゝり、綱が襟がみむんずと掴み引き立て行かんその有様、ナニこしやくなりとぶり放す、又も掴みし強魔の力、此方は動かぬ金剛力、引きつ、引かるゝ時しもあれ、一天俄にかき曇り、震動なして四方より黒雲覆ひ重りて、砂石を飛す暴風に連れて虚空へ引き上れば、あやしかりける次第なり。



# 妹脊山婦女庭訓

脊山の段  
妹山の段



脊山の段

大判事 竹本津太夫

鶴澤寛治郎  
津の子太夫改め

久我之助 竹本濱太夫

野澤勝平

妹山の段

定高 豊竹古靱太夫

鶴澤清六

琴野澤勝芳

雛 島竹本南部太夫

鶴澤重造

古く幸若舞曲の「大職冠」を承け、操淨瑠璃に藤原鎌足と蘇我入鹿大臣のことを仕組んだものに正徳元年（二三七一）竹本座上演の大近松作「大職冠」、寛保三年（二四〇三）四月竹本座上演の竹田出雲作「入鹿大臣皇都諍」があり、これに暗示を受けて作られたのがこの「妹脊山婦女庭訓」全五段で、作者は近松半二、松田ばく、榮善平、近松東南に後見として三好松洛が名を列ね、明和八年（二四三一）正月、竹本座に上演された。結構は雄大趣向は奇妙、正に王朝物の代表作で、大和方面に古來有名な説話傳説を活用し巧妙複雑な技巧の極致を見せてゐる。殊に全五段の中ではこの三段目切山の段が舞臺技巧の頂點を示すものとして名高い。

梗概

元兎のはびこる世にも色は變らず櫻花、咲き亂

人形役割割

妹 脊 山 の 段

|      |    |   |   |   |   |    |
|------|----|---|---|---|---|----|
| 大判事  | 清  | 澄 | 吉 | 田 | 榮 | 三  |
| 久我之助 | 清舟 | 桐 | 竹 | 政 | 龜 |    |
| 後室   | 定  | 高 | 吉 | 田 | 文 | 五郎 |
| 娘    | 雛  | 鳥 | 桐 | 竹 | 紋 | 十郎 |
| 腰元   | 小  | 菊 | 吉 | 田 | 文 | 作  |
| 腰元   | 桔  | 梗 | 吉 | 田 | 光 | 之助 |

れた彌生の頃、久我之助は父の勘氣を受けて領内紀伊の脊山に籠居し、法華經を讀誦して心を澄してゐる。又雛鳥は清舟を慕ひ、病と稱して領内大和の妹山に養生し、侍女と共に雛祭をして氣を晴してゐる。この兩家の山莊は吉野川を隔てゝ相對してゐる。

雛鳥の侍女小菊、桔梗等は雛鳥の心を知つて之を慰め、雛鳥の戀文に石を括り附け、對岸まで届けかしと念じて之を投げた。其の文は石と共に川中に落ちたが、瀧つ瀬に轉がり押上げられ突流されて行く。久我之助は之を眺め、愛人からの戀文とは氣も付かず「石が水に沈まぬも世の逆さま事の習ひか、さるにても父の底意はいかに」と、之を占ふ爲めに柏の葉を川に投げた。之を見た雛鳥は對岸に駈出で「ナウ久我様か懷しや」と聲を掛けた。久我之助も「オウ雛鳥無事で」と互ひに顔を見合せ、橋渡しなき水の流れを恨んで遣る瀬ない戀に胸を焦す。

る。

(床本) 山の段

この時大判事と定香とは入鹿に命ぜられた難題に張裂けんばかりの憂愁を胸に秘めて、それ／＼の山莊に入り來り、思ひ／＼に入鹿の命を語つて愛子の心を試す。然るに久我之助は人臣の道を重んじ、雛鳥は貞婦の道を守つて共に死を決す。是に於て兩家の親は愛子を殺しても、せめては其の愛人を助けたく、互ひに言合せた様に櫻花の枝を川に流して我が子の無事を知らせて安心させる。

然も定香は意を決し、愛人の爲めに喜んで命を捧げる愛子の成佛を祈り、血の涙にくれて雛鳥の首を刎ねる。又、久我之助は采女の所在を父に告げて、刀を腹に突立てる。相愛の兩人の親は無量の感慨に打たれ、直ちに兩家和睦して共に死ぬる各々の愛子の爲めに婚姻を結ぶ事となり、定香から雛鳥の嫁入として、其の首と共に雛道具や調度を吉野川に浮べて贈り來る。大判事は泣いて之を受取り、久我之助に雛鳥の首と未來の契りを結ばせて介錯し、やがて入鹿誅伐の當麻の義軍に投ず

古への神代の昔山跡の國は都の始にて、妹脊の始め山々の中を流るゝ吉野川。塵も芥も花の山、げに世に遊ぶ歌人の言の葉草の捨所妹山は、太宰の少貳國人の領地にて川へ見越の下館脊山の方は、大判事清澄の領内。子息清舟日外より、爰に勘氣の山住居、伴ふ物は巢立鳥、餌と我と只二つ、經讀む鳥の音も澄みて心細くも哀なり。頃は彌生の初つゝろ、此方の亭には雛鳥の氣を慰めの雛祭り、桃の節句の供物。萩の強飯侍女の小菊、桔梗が配膳の腰もすうはり春風に、柳の揚枝端近く、同喃小菊、平常のお雛は御殿でお祭なさるれど、姫様のおしつらひで、此山屋の假座敷、谷川を見晴し、櫻の見飽き、雛様も一人お氣が晴れて可からうの、此方も追付け好い殿御をもつたら、常住あの様に引付いてゐたら嬉しかる。フウ桔梗の何いやるやら、何程女夫並んでゐても、あの様に行儀に長つて斗りゐて、手を握る事さへならぬ、窮屈な契は厭や、肝心の寢る時は、離れ／＼の箱の中、思の斷える間はあるまいと、仇口々も雛鳥の胸にあたりの人



目堀く、辛い戀路の其中に、親と親とは昔より、御仲不和の關となり逢ふ事さへも片糸の結ばれ解けぬ我思ひ、戀し床しい清舟様、此山の彼方にて、聞いたを便り母様へ、お願ひ申して此假屋。お顔が見たさの出養生、爰迄は來れども、山と山とが領分の境の川に隔てられ、物云交す事さへも、ならぬ我身の儘ならぬ。今は却々思の種いつそ隔てゝ戀ひ侘びる、逢れぬ昔が勝ぞかしと、切なる思ひ搔くとき、歎けば俱に侍女共、お道理でござります、ほんにひよんな情事で、隣同士の紀の國大和御領分の競合で、爾お二人の親御様は摺れ々々雛鳥様と久我様の妹脊の中を引分くる、妹山香山、船も筏も御法度で唯だ此川一ツ、つい渡られさうなもの、小菊瀬踏して見やらぬか。ヲ、滅相な、此谷川の逆落し紀州浦へ一とぎに流れて往たら鮫の餌食、したが申し雛鳥様、お前の病氣をお案じなされ、此假屋の出養生さしなすつたは、餘所乍ら久我様にお前を逢す後室様の粹なお捌き。女夫にして下さりませと直にお願ひ遊ばしたら、よもや厭とは岩橋の渡る事こそならずとも、切て遠目にお姿をと。障子ぐわらりと縁端に覗き溢るゝ侍女共、久我之助は、うつ

ゝと父の行末身の上を守らせ給へと心中に、念彼觀音の經机、案じ入つたる顔形、手にとるやうに喃あれゝゝ。詞机に凭れて久我様の物思はしいお顔持、お癪がな發りつらん。詞エ、お傍へ行きたい、コレ爰にゐるわいなといへど招けど谷川の漲る音に紛れてや、聞えぬ辛さ。詞エ、辛氣、此方が思ふやうにもない、コレコツちや向いて見たが可いと焦燥るお傍に氣の付々。詞ほんにと夫よ口ではいはれぬ心の丈、豫て認め奥山の鹿の卷筆封じ文。戀し小石に縛りそへ、女の念の通ぜよと祈願を籠めてうつ礫。からりと川に落ち瀧津、波にせかれて流れゆく。詞エ、どんな心の念は届いても、女の力の届かねば思ふた斗り片便り、返事を松浦佐用姫の、石になりともなりたひとひれふす山の效もなき。久我之助川に目を着け。詞何處よりか水中に打つたる石は重けれど、逆捲く水の勢に沈みもやらず流るゝは、ム、重き君も、入鹿といふ逆臣の水の勢には敵對難き時世の習夫を知つて暫しの中、敵に従ふ父大判事殿の心。善か悪かを三つ柏、水に浮めば願叶はず、浮む時は願成就吉野を假の御祓川。大神宮へ朝拜せんと柏の若葉摘取つて、谷を傳ひに水の

面。見遣る女中が、申し――詞今の小石が屈いたか、久我様が川へ下なさるゝ。あの岩角の折曲りが川巾がいつち狭い、幸の好い逢瀬といふに嬉しさ雛鳥の飛立許り振袖も、裾もほろ／＼坂道を、折柄風に散る花の櫻が中の立姿、しどけ難處も厭なく、喃う久我様が懐かしやといふに思はず清舟も、雛鳥無事でと顔と顔。見合す斗り遠き間の心斗りが抱合ひ、詮方涙先だてり。詞申し清舟様、わしやお前に逢たさに病氣と云立て、爰迄は來てゐれど親の許さぬ中垣に忍んで通ふ事叶はず、女雛男雛も年に一度は七夕の逢瀬はあるに、此のやうにお顔見ながら添ふ事のならぬは何の報ぞや、妹脊の山の中を隔つる吉野の川に鵲の橋はないかと口説言。聞く清舟も楫あらば、早渡りたき床しさを胸に包みて。詞道理――、我も

ば、我も世上を憚りて、此山奥の隠れ往。心の儘に鶯の聲は聞けども籠鳥の、雲井を慕ふ身の上を思遣れよし鳥と。儘ならぬ世を怨み泣。詞喃、又過ふ事もあらうとは別るゝ時の捨詞。假令未來の父様に、御勘當受けるともわしやお前の女房ぢや。逆も叶はぬ浮世なら、法度を破つて此川の早瀬の波も厭ふまじ、何處如何なる方へなど連れて退いて下さんせ。詞私は其處へ行ますと、既に飛込む川岸に慌て驚き留むる侍女。イヤ／＼放しやと泣入る娘。詞ヤレ短慮なり雛鳥、山川の此早瀬。水練を得たる者だに渡り難き此難所。忽ち命を失ふのみか、母後室に歎きを懸け、我にも愈憎惡が懸る、科を重ねる道理、必ず逸り召れなと、制する詞一筋に思詰たる女氣も、今更弱る折こそあれ。詞大判事清澄様御入なり、と報する聲。はつと驚き久我之助、歸るも名残押、留むるも我身を我身の儘ならず、コレ喃待つての聲斗り後室様お出と、告ぐる下部に詮方も泣く／＼庵のうち悄れ、登る坂さへ別路は、力難所をゆく心地、空に知れぬ花曇り、花を歩めど武士の心の嶮岨力して、削るが如き物思ひ、思ひ逢瀬の中を裂く、川邊傳ひに大判事清澄、此方の岸

より太宰の後室さだかに夫と道分の石と意地とを向ひ合ふ、川を隔て、詞大判事様、お役目御苦勞に存じますと聲襤褸もかい取の、夫の魂放さぬ式禮。清澄も一棊し詞早かりし定香殿、御前を下るも一時、參る所も同一なれども、此香山は身共が領分。妹山は其元の御支配、川向の喧嘩とやら、睨合ふて日を送る此年月、心解けるか解けぬかは今日の役目の落去次第、二ツ一ツの勅命、狼狽へた捌召るなど眼背ぐしやつく茨道、脇へかはして仰の通り。詞入鹿様の御説意はお互に子供の上、受合ふては歸り乍ら、身腹は分けても心は別々、若あいと申さぬ時は、マアお前には何處せうと思し召す。知れた事、御前で承つた通り首打放す分の事さ所存な悴は、有つて益なく無うて事缺けず、身の中の腐りは、殺いで捨てるが後の養生、畢竟親の子の名をつけるは、人間の私、天地から見る時は、同じ世界に湧いた虫、別に不憫とは存じ申さぬ。ハテ強い念ひ斷り。私は又いかう了簡が違ひます、女子の未練な心からは、我が子が可愛うてなりませぬ。其代りにお前の御子息様の事は眞實何とも存じませぬ。只大切なは此方娘、忝い入鹿様のお聲の掛つた身

の幸、假令どう申さうとも、母が勤めて入内させ、お奥様と多くの人に、敬ひ傳かさうと思へば、此様な嬉しい事はござりませぬ。ホ、と、空笑ひ。詞ム、して又得心せぬ時は、ハテそりや最う是非に及ばぬ。枝振悪い櫻木は伐つて接木を致さぬば、太宰の家が立ませぬ。ヲ、爾うなふては叶ふまい。此方の悴とても、得心すれば身の出世、榮華を咲かす此一枝、河へ流すが報せの返答。盛ながらに流るゝは吉左右、花を散らして枝斗り流るゝならば、悴が絶命と思はれよ、いかにも此方も此の一枝娘の命活花を散さぬやうに致しませう。ヲ、サ今一時が互の瀬越し此國境は生死の境返答の善惡に依つて、遺恨に遺恨を重ねるか、さあ是迄の意趣を流して中吉野川と落合ふか、先それ迄は双方の領分、お捌を待つて居ますと、詞峠つ親、山と大和路別れても、變らぬ紀の路恩愛の惱は霞に埋れし庵の内に別入る。立派にいひは放しても、定かにしらぬ子の心、覺束なくも呼子鳥、娘々と谷の戸に、訪ふ初音雛鳥も、母の機嫌を差足に。詞母様ようぞ、今日はお目出たう存じますと、武家の行儀の三ツ指に堅い程猶親子の親み。詞ヲ、能う飾が出来ました今

日は和女の顔持も可ささうで、一双目出度い、母も祝ふて献上の此花供へてたも、幾歳になつても雛祭は嬉しいものゝ一女子共何なりと娘が氣に合ふ遊をして、随ふといさめてくれと、何時に勝れし後室の機嫌は訴訟のよい出機。詞今のもちやつと乗出して、御覽じませと侍女に腰押へられても兎やかうと、いひそゝくれのもつれ髪。詞イヤ喃雛鳥脊丈延びた娘も親の傍に引付けて置くは病の種、夫で急に思案を極め、和女によい殿御を持す嫁入さすが嬉しいか、エ、ハテ氣遣しやんな、可愛い娘の一生を任す夫、和女の氣に入らぬ男を何の母が持さうぞナア侍女ども。ハイ、左様でござります。お氣の通つた後室様、嫁入の先は大方今のナ、焦るゝ君でござりませうと、押し難い當處も得手勝手、誰にか縁も組紐に、胸に眞紅のふさがる箱、取出し妹脊も並ぶる雛の日は、嫁入の吉日、此箱の豆は極る殿御、雛の御前で夫定め。コレ和女の夫といふは、誰あらう入鹿大臣様じゃわいのエ、爾なら私を嫁入さすとは、ヲ、太宰の少貳が娘雛鳥美人の聞え叡聞に達し、入内させよと有難い御言。エ、イはつと惻りうろゝと、言葉は涙ぐむ計り、詞ヲ、膽

が潰れる筈、夫と申すも畏多い上位の方を聲にとる家の面目、日本國に此上のない嫁入の隨一、果報な娘、此様な目出たい事があるものか、ナア女子共。ハイ、お目出たいと申さうか、いつそ亂騒ぎでござりますと工合違ひの嫁入に、菊も桔梗も投首の二人は小腹立つてゆく。母の心も色々に咲分の枝差出し。詞親が許さぬ云交し、淫奔は呵つて返らず、一旦思初めた男、何時迄も立通すが女の操、破りやとはいはぬが貞女の立様がありそんなもの、篤りと能く思案しや。此花は八重一重、互に不和なる親々の心揃はぬ二ツの花、一ツ枝に取結び、切放すに離されぬ惡縁の仇花、今和女の心次第で、當時入鹿大臣の深山嵐に吹散され、久我之助は腹切ねばならぬぞや雛鳥と縁切つて、入鹿様へ降参すれば、清舟の命も助る報せは川へ流す櫻、散るか散らぬは身の納り、時に従ふ風に靡き、君が手活の花になれば八重も一重も愚なり、戀しと思ふ久我之助、助けうと殺さうと、今の返事の唯一ツ、貞女の立様サア、見たいと戀も情も辨へて、義理の柵堰止めても、涙せき上げ、乍ら、母様段々聞えました。お言葉は背きませぬ。爾なら得心して入内して



たもるか。アイ／＼、ヲ、嬉しや出来しやつた／＼。夫でこそ貞女なれ。馴れぬ雲井の宮仕へ、武家の娘と笑はれな、今日より内裏上臈の。鬘髪も改めすべしかし、祝ふて母が結直して遣ましよと。いそ／＼立ち乍ら娘の心思遣り、別れも櫛の果敢なさも解ほどこかれぬ憂き思。重き春山の庵の内、父の前に謹んで、久我之助が心底聞し召ふゆられ、切腹の赦免下さるゝ事、身にとつて如何許り大慶至極と手を支けば、默然たる大判事、やゝ打濕む目を開き、爾今朝入鹿大臣、此大判事を召出し、先帝寵愛の采女、身を投げ死んだりと偽り、其方が悴久我之助、人知れぬ方へ落し遣りしに極れば、必定汝等が方に隠匿あるべしとの難題、元より知らぬ大判事、よく／＼思へば采女の御難を避けん爲、猿澤の池に入水の體にもてなして、密に落し参らせしは、中々久我之助の智恵でない、鎌足公の指圖をうけての計らひと、知つたは身も今日が始、親にも隠し包みては、大事を洩さぬ心の金打、若輩者には神妙の爲方、ハア出来したりと思ふにつけ、邪智深き入鹿、久我之助が降参せば、命を助けん連來れと、情の言葉に釣寄せて拷問に懸けん謀計、責殺

さるゝ苦みより、切腹さすれば采女の詮義の根を斷つ大功、天下の主の御爲には、何悴の一人など菴に生へる草一本、引抜くより些細な事と涙一滴零さぬは武士の面、子の可愛うないものが、凡そ情ある者にあらうか、餘り健氣な子に耻ぢて、親が介錯してくれる。侍の綺羅を飾り、厳しく横へし大小、悴が首を切る刀とは、五十年來知らざりしと、老の悔みに清舟も、親の慈悲心難有涙、命二ツあるならば、君には死んで忠義をたて、父には生て養育の御恩を送り申さんに、今生の殘念こそ一ツと顔を見上げ見下して、わつと平伏す親子の誠。此方の亭には母後室。爾サア／＼目出たい、和女の名は雛鳥も其儘の内裏雛、装束の着様も、此女雛と見合せて、サア／＼早うとありければ、怨めしげに打守り、女夫一ツは何時迄も添遂げるこそ雛の徳、思ふお人に引離され、何樂しみの女御后、茨の衣の十三重、雛の姿も怨めしと、取つて打付け縁板に、ころりと落ちし女雛の首。驚く母の胸板に必死と極る娘の命、包めどせきくる、はら／＼涙。爾娘入内さすといふたは偽りまづ此様に首斬つて渡すのじやわいのう。エ、そんなら、貞女を立さし下さります

か。エ、忝い有難いと、伏拜む手を執つて、喃入内せず  
に死するものも、それ程嬉しがる娘の心しらいでならう  
か。詞あつと受けても自害して、死ぬと覺悟は知り乍  
ら、和女の死ぬる事聞いたら、且合ふた久我之助、俱  
に自害召れうもしれぬ、切て一人は助けたさ一旦得心し  
たにして、母が手づから解いた髪は下髪じやない、成敗  
の搔上髪介錯の支度じやわいの。高いも低いも姫御前の  
夫といふは唯だ一人、穢はしい玉の興、何の母も嬉しか  
る。詞祝言こそせぬ、心斗りは久我之助が、宿の夫と思  
ふて死にや程に思ふ間、一日半時添しもせず、寒の河  
原へ遣るわいと、引寄せゝ雛鳥も、膝に取着き抱着き  
忝さと嬉しさと逢はで別るゝ名残の涙、一ツに落つる三  
ッ瀬川。川を隔てゝ清舟が、最期の觀念わるびれず、燒  
刃直なる魂の九寸五分取直し、腹にじつと突立つる。詞  
ヤレ暫く引廻すな覺悟の切腹急ぐ事はない、コリヤ冥土  
の血脈、讀さしの無量品、親が讀誦する間、一生の名残  
女の面、一目見て何故死なぬ。イヤ存じもよらぬ此期に  
及んで左程狼狽へた未練な性根はござりませぬ。去乍ら  
今端の際の御願、私相果てしと聞かば、義理に繋がれ雛

鳥も生害俱にと申すべし、詞然ある時は太宰の家も斷絶  
暫くの間乍ら、切腹の義はお隠しなされ降參承知致せし  
體、後室方へお報知あらば、女も得心仕り、入内致せば  
彼が爲。不義の汚名は受たれども、是ぞ色に迷はぬ潔白  
詞ヲ、出來した、よく氣が注いた、年頃立て抜く、武士  
の意地、不和な中程義理深し、命を捨つるは天下の爲、  
助くるは又家の爲。詞氣遣ひせずと最期を清う。花は三  
芳野侍の、手本になれと潔く、いへど心の亂れ咲、可惜  
櫻の若者を散す惜さと不愍さと、小枝に濺ぐ血の涙、落  
ちて波間に流れゆく。夫ともしらず喜ぶ雛鳥。詞アレ  
ゝ花が流るゝは、嬉しや久我様のお身に心ないしるし  
私は冥土へ參じます。千年も萬年も、御無事で長生遊ば  
して未來で添ふて下さんと、心でいふが暇乞。詞思ひ  
置く事云ひ置き事、最う何にもござんせぬ、片時も早う  
サア母様斬つてゝと身も惜まぬ、我子の覺悟に勵まれ  
胸を定めて執上ぐれば、刀は鞘に錆付く如く、離れ棄た  
る血筋の羈。今斬殺す雛鳥を無事で報ずる返事の櫻、同  
じく川に浮ぶれば。詞ア、嬉しや是ぞ雛鳥が入内の報知  
久我之助が心の安堵、采女の方の御所在は最前申上ぐ

る通り、此世に心残なし、御苦勞乍ら御介錯。サア、母様斬つていの。未練にごさんす母様と泣かぬ顔する可憐しさ、刀持つ手も大盤石。思は同じ大判事、子よりも親の四苦八苦、命も散り、日もちり。同ハア爾うじや、はや西に入る日輪は、娘がお迎ひ彌陀の來迎、西方淨土へ導き給へ。南無阿彌陀佛と目を閉ぢて、念ひきつたる首諸共、わつと泣く聲應ゆる反響。同臆に徹して大判事、刀かくりと落ちたる障子。同ヤア雛鳥が首討つたか久我殿は腹切つてか、ハア死なしたりとどうと座し、悔むも泣くも一時に、呆れて言葉もなかりしが、やゝあつて定香聲をあげ。同入鹿大臣へ差上たる雛鳥が首、御檢使受取下されと、呼はる聲を吹送る、風の案内に大判事、歎きの姿改めて、衣紋繕ひ徐々と、下立つ河邊の柳腰、娘の首を搔抱き。同大判事様、別て何にも申しませぬ、御子息の御命は何卒と思ふた效もない。敢ない有様、お前様のお心も、推量致して居ます。添ふに添れぬ惡縁を思合ふたが互の因果、此方の娘も、そひたいと思ひしに。同餘り不惑に存じます。せめて久我之助殿の息のある中に此の首を其方へ渡し申すが、娘を嫁

入さす心。實に尤嫁は大和、掣は紀の國。妹春の山の中に落つる吉野の川の水盃、櫻の林の大鳥臺。目出たう祝言さしませうわい、爾なら是迄の心も解けて。同ハテ互にあひやけ同士、エ、忝ないと悦ぶも後の祭、ほんに春丈延びたる者を、何時迄も、子供の様に思ふて暮すは親の例ひ、甘やかした雛の道具、一人子を殺して何にせう跡におく程涙の種。同侍女共其一式、残らず川へ流れ瀧頂、未來へ送る嫁入道具、行器、長持、犬張子、小袖簞笥の幾棹も、命存へおるならば、令一世一度の贈物、令五町七町續く程、美々しうせんと樂みに、思ふた事は引換へて、水になつたる水葬禮、大名の子の嫁入に乗物さへも中々に、形見も仇の爪琴に、首取載する弘誓の船、彼方の岸より彼岸に、流るゝ血汐清舟が、今端の顔容見る親の、口に祝言心の唱名。同千秋萬歳の千箱の玉の緒も、切れて今は敢なき此死顔。生きてゐる中此様に、聲よ嫁よとならば、如何許り悦ばんに、領分の遺恨より、意地に意地を立通す、其上重る入鹿の疑、仲直るにも直られぬ、義理になつたが二人の不運。同あれ程思詰めた嫁、何の入鹿に従はう、とても死ねばならぬ子供、一時

に殺したは、未來で早う添してやりたさ、云合さねど後室にも是まで不和の大判事も、あひやけと思し召せばこそ、倅に立て一人の娘、ヲ、よくぞお手に掛られし、過分に存ずる定香殿。同ヲ、勿體ない、其お禮は彼方こちら、不來な娘故、大事のお子も御切腹、器量筋目も勝れた殿御、夫に持つは果報者。とは云乍らあれ程迄、手汐に掛けて育てた子を又手に掛けて斬る心。同推量致してをる、武士の覺悟は常乍ら、緩急の時は取亂し、介錯爲後れ面目ない。イエー、夫で目出たい此祝言。是がほんのさう嫁入、一代一度の祝言に、聲殿の無紋の袴。同首斗りの嫁御寮に對面せうとは知なんだ。夫も子供が遁れぬ壽命、兎にも角にも世の中の子といふ文字に死の聲のあるも定まる宿業と隔つる心親々の、積る思の山々は解けて流れて吉野川、いと漲る斗りなり。涙拂ふて大判事、首搔上げて聲高く。同倅清舟承れ人間最期の一念によつて、輪廻の情を引くとかや、忠義に死ぬる汝が魂魄君父の影身に附添ふて朝敵退治の勝戦を草葉の蔭より見物せよ。今雛鳥と改めて親が許して盡未來、五百生まで變らぬ夫婦、忠臣貞女の操をたて、死んだる者と高聲に

閻魔の廳を名乗つて通れ、南無成佛得脱と唱ふる聲の聞えてや、物得いはねど合す手を、合せ衆たる此世の別れはや日も暮れて人顔もみえず庵の霧隠れ、埋む娘の亡骸は、此方の山に留れど、合首は背山に檢使の役目、我子の介錯涙の雛、よしや世の中憂き事は、何時か當麻の大和路や、合後に妹山、先だつ春山、恩愛義理を堰下す、涙の川瀬、三吉野の花を見捨てゝ出でゝゆく。



新口村の段

新口村の段

人形役

龜 傾 忠 樋 傳 鶴 置 針 親 捕  
 新 屋 城 三 口 掛 立 孫 捕  
 人 口 忠 梅 水 藤 頭 右 手  
 形 村 兵 女 右 兵 道 衛  
 役 の 衛 川 房 門 衛 巾 庵 門 頭 手

竹 鶴 割  
 本 本 澤  
 南 伊 清  
 部 達 二  
 太 太 一  
 夫 夫 郎

吉 桐 吉 吉 吉 吉 吉 吉 吉  
 田 竹 田 田 田 田 田 田  
 紋 多 小 榮 紋  
 玉 三 兵 三 十  
 幸 郎 郎 吉 郎 郎 次 郎 德 郎 大 吉

梅川 忠兵衛  
 戀飛脚大和往來

新口村の段

大近松作の「冥途の飛脚」(「寶永八年(二三七一)三月竹本座上演」と、これを改作した紀海音作の「傾城三度笠」(「正徳三年(二三七三)十月(曾根崎新地芝居)豊竹座上演」との二作をつき合せて菅專助、若竹笛射合作で、「けいせい戀飛脚」が安永二年十二月(二四三三)豊竹此吉座で上演されたが、この作が歌舞伎に入つて「戀飛脚大和往來」と改題され、この「大和往來」が操に更に逆輸入されて天保元年閏三月(二四九〇)から北堀江市の側の芝居で「戀飛脚大和往來」の外題で新口村の段が上演され今日に及んだ。尙全曲は上下二巻よりなり、上巻は生玉の段、飛脚屋の段、下巻は西横堀の段、新口村の段に分れてゐる。

梗概

此處大和の國新口村は、たゞさへ都離れたわび

しさに、雪さへ降り籠めて年の暮と云つても人影少ない片山里だつた。

今日はどうしたものか忠三郎の家の界限に、節季候だの古手買だの順禮だのと、うさんくさい者たちがうろついて居た。

大阪新町の茶屋で、八右衛門への意地づくで、官金の封印を切つてしまつた龜屋忠兵衛は、犯した罪のほども恐しく、遊女梅川と手に手を取つて人目を避け我が親里新口村へと落ちて來たのであつた。

旅馴れぬ梅川をいたはりながら、親孫右衛門には家來同然の忠三郎の住家へ立ち寄つて、忠三の女房に様子を聞いてみると、忠兵衛の詮議の手は早くも此處までのびて居ることを知つた。忠三の女房が二人の顔を知らぬのを幸ひ、それとは告げず留守の忠三郎を呼びにやつた。

忠兵衛が、實の親孫右衛門に直かに會へないのは義理と云ふものがあつたからだ。忠兵衛は養子

として早く大阪へやられ、養子親の妙閑と云ふものがあり、許嫁のおすはと云ふものがある身の上で、今度の仕儀に及んだのであつた。然し梅川と現在の様な仲になり今大罪を犯してしまつた忠兵衛とすれば、今生の名残りに一目親の孫右衛門の顔が見たかつたのだ。

障子の内で梅川としばし涙にくれて居たが、ふと外を見ると懐しい故郷の人々が、野中の畠道を吹雪をあび乍ら道場参りにつゞくのが見えた。

その中に緞子の肩衣に老の足もとぼ／＼と近づいて來る年よりがあつた。これこそ父親の孫右衛門に間違ひなかつた。然し詞さへかはすことの出來ない今の身の因果に、忠兵衛は身もだへしたのだつたが、梅川も初めて見る我が舅、男のため孝行もしたいとつぶやきつゝも、如何ともする事の出來ない夫婦なのだ。

孫右衛門はそれとも知らず此の家の門口を通り過ぎ様とした時、ついすべつた薄氷に、足駄の鼻



緒をぶつり切らして轉んでしまつた。これを見た梅川はもう黙つては居られなく、走り出て孫右衛門を抱き起したそしてお足も洗ひ鼻緒も上げて上げませうと云ふので、孫右衛門は見なれぬやさしい女性の出現に驚いたのであつた。

様子を聞くと、たゞ旅の者とはかり舅の親父さまと同じ年配、生きうつしの懐しさに、御用に立てさせて頂きますと云ふのだ。詞の端にさてはそれと氣のついた孫右衛門は涙を押しかくし、不行跡のわが子のいとしさを、それとなく託ち、養子親の妙閑殿は忠兵衛詮議のため一昨日牢に入られ、その義理として若し忠兵衛がこの邊へ來たら親が細かけ渡さねばならぬ。あゝどうぞ來て呉れねばよいが、然し一日でも早く妙閑殿を牢から出すのが何よりの孝行、覺悟を極めて名乗つて出したがそれも親の目にかゝらぬ所で、と血筋の恩愛に泣き沈んだ。

そして梅川に金一と包を與へ、これを路銀に遠

い所へ立退いて呉れ、と云ふので、梅川はその金を押いたゞきこの世の別れにその人に一目逢つてやつて呉れと頼むのだつた。

然し逢へば繩をかけるか、訴人しなければ濟まない義理固い孫右衛門だつた。それではと、有合ふ手拭で目かくして、一と間に煩へる忠兵衛と親とも子とも名乗らず手と手を取りかはして名残りを惜んだのであつた。

折柄あたりは物さはがしく、今朝からその邊りの様子を伺つて居た巡禮たちは捕手の役人と打ちつれ、忠兵衛の詮議に來たのだつたが、そのまゝ引返して行つたので、孫右衛門は二人を裏道から逃がし、後影の見えなくなるまで聲をしきりに、叫びつゝ落ちゆく道筋を教へたのだつた。

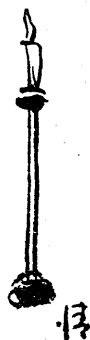
### (佐和利) 新 口 村 の 段

コレ忠兵衛様、ほんに爰は劍の中、斯うして居ても大事ないかえ、ア、いや、男氣な忠三郎、頼んで今

夜は爰に泊り、死ぬる共故郷の土、生の母の墓所、いつしよにうづまれそなたにも、嫁姑と引合せ、未來の對面さしたいと、おろ／＼涙梅川もそれは嬉しうござんせう去ながら、私がとゞ様かゝ様は、京の六條珠數屋町、定めて此間詮議に合ふて居さんせう、かゝ様は眩暈持若もの事は有るまいかと我身のうへより案じられ、今一度京の兩親に、一目あふて死たうござんす。

お心付いたこのお金、逆様乍ら戴きます、大阪を立ち退いても、私が姿目に立てば、駕籠に日を遂り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日餘りに四乗兩、つかひ果して二分残る、金故大事の忠兵衛様、科人にしたも私から、懽憎からうお腹も立とうが因果づくど諦めてお赦しなされて下さりませ、親子は一世の縁とやら、此世の別れにたつた一目、逢うて進せて下さんせ。





上の巻 濱

千鳥

海海

女士

下の巻 二

人 禿

禿禿

竹竹竹竹  
本本本本  
さ陸文源  
の路太太  
太夫太夫

豐豐鶴鶴鶴鶴鶴鶴竹豐竹竹豐  
澤澤澤澤澤澤澤本竹本本竹  
仙廣鶴叶友友 織松播雛和  
太 太 子島路太 泉  
松若郎郎平造 叶太太太夫

西亭作詞符 山村若榮振附 大塚克三舞臺裝置  
景事 春げしき双草紙

上の巻 濱 千鳥  
下の巻 二人 禿

本曲は今度新しく西亭により作詞作曲され、初めて文  
樂座の舞臺に上場されることになつた所作事で、上の巻  
濱千鳥、下の巻二人禿の全二景からなり、振附は山村若  
榮がこれに當つた美しく賑やかな新曲である。

(床本) 里げしき双草紙

上の巻 濱 千鳥

おもしろや、朝な夕なの浦げしき、君を松風漁火の、  
さめてほのゝ明石潟、わしが思ひの、はかもなき、海  
人が焼くかや薄煙り、消ゆるも淡路、文づての、泣く音  
淋しい磯千鳥、エ、にくてらしい眞顔でナ、口舌にわし  
を泣かそでな、主の思ひの朝ぎりに、こちが心の須磨の  
浦、汐の満千の氣も知らで、磯邊の移り香に、あり  
し其夜が思はるゝ、夜さも伏床に寝もやらで、來るか來  
るか濱へ出て見れば、小松の葉越しの月が、につと淋  
しく笑やした、逢ふた今宵は千夜の一夜、程はやらじと  
引綱に、つなぎとめたるもやひ舟、春のちんゝ千鳥が

豐野野竹野鶴鶴鶴豐鶴豐鶴野野野豐豐竹竹竹竹豐竹竹  
澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤澤竹竹本本本本竹本本  
猿勝龍團勝一清友仙友新友八喜吉千呂南土叶隅宮津常  
二之 郎右衛門友三三十三太太代之彌夫夫夫夫夫夫夫  
郎介市作芳門友郎郎郎郎造助

いふにや、今宵一打櫓で、のほんえほん、夏のちんちん、千鳥がいふにや、今宵二打櫓で、のほんえほん、秋は、さん／＼三打櫓で、のほんえほん、冬は八打櫓で、のほんえほん、ヤレのほんえほん、引いっ引かれつ女浪と男浪、濱の眞砂の盡くるなき、實に面白や、四季の浦。

下  
の  
卷  
二  
人  
禿

春風に、うかれゝて花の里、かむろゝと、澤山そふに、言ふておくれな、エ、うきの里、そとでなぶられ、内ではせかれ、ほんに身もよも内證の、文の使ひの二度三度、いつが春やら、花ぢややら、朝の六ツから、上衣下衣引き重ね、禿は袖のふり初め、つくつくつくは羽をつく、二一二三四、五重に、七重に、琴は十三十四五、二十三日の月さま、ついた、てんまでついた、エ、ついたえ、てんゝ手まりの、糸さま、可愛い、京で一番糸屋の娘、二番よいのは、人形屋の娘、三でよいのは酒屋の娘、酒屋は娘は、きりよぶが良ふて、京で一番、大阪で二番、さがで三番、吉野で四番、御所で五番のいとさん見れば、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花、咲いたゝ、咲いた櫻になぜ駒繫ぐ、氣もつ風さへ、よぎて吹く、花も可愛か、手折もせまい、かわい小櫻糸櫻、かむろは室の初櫻、散るは吉野の山櫻、さて面白い花の里、心ごゝろで楽しまん。

人形役割

濱千鳥の段

海士

吉田 榮三

海女

吉田 文五郎

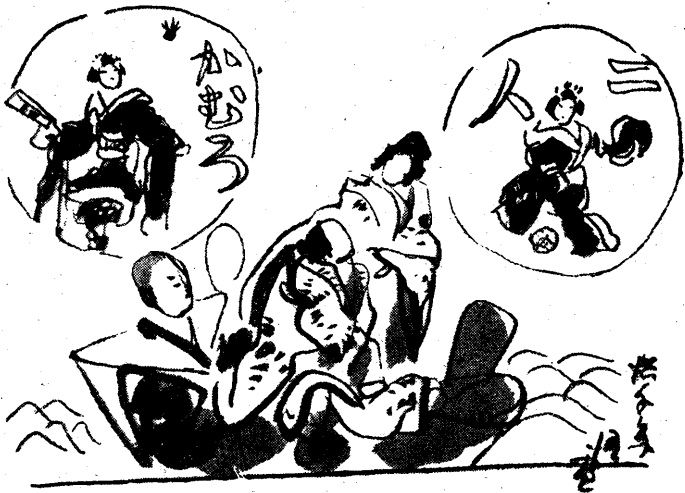
二人禿の段

禿

吉田 榮三

禿

吉田 文五郎



# 文樂鑑賞手引

文樂の鑑賞に役立ちさうなことを、簡単に、全體的の事についてだけ書いて見よう。

文樂座のこと——人形淨瑠璃の組織とその由來  
舞臺のこと——人形の遣ひ方のこと——だいたい、そんな順序で申上げてみませう。

人形淨瑠璃では、文樂がたつた一つの傳存劇團になつてしまつた。地方的、郷土的にはほかにもあるが、常設劇場を有するものと言つてはない。けれども、文樂は寛政年度、おほよそ百五十年ほど前、淡路の人植村文樂軒によつて大阪に生れた劇場である。さうして、この三四十年來は、殆ど

本邦唯一の人形劇團なのであつて見れば、「文樂」が「人形淨瑠璃芝居」の同義語のやうになつたのも當然でせう。古い所では、江戸にも大阪にも、五座七座と人形芝居があつて、歌舞伎に對抗し、時としては、享保から寶曆あたりまでは、つまり二百年前には、人形芝居のほうが盛んであつた。

普通に、三業より成り立つと言はれる。即ち、淨瑠璃を語る太夫と三味線弾きと人形遣ひの三者によつて組織されてゐるからである。ところで、この三者は、初めから一緒に生れて發達して來たかといふに、さうではなかつた。

人形を遣ふといふこと、これはずうつと古くからありました。記録にあらはれた所では、遠く平安時代に傀儡子（くゝつまはし）といふものが見える。傀儡子は、支那の西方、中央アジア地方から漂遊して來た街頭演藝人であつたらしく、平安時代とあれば約一千年の前のことになる。淨瑠璃は足利時代中期の發生となつてゐるから、五百年の歴史と言へるでせう。これに對して、三味線は永祿年中に、琉球から泉州堺港に輸入された蛇皮線の本邦化なのであるから、ザツと三百七八十年前の舶來樂器である。先づ淨瑠璃と三味線とが提携し、慶長の初年あたりに、その淨瑠璃と人形遣ひとが握手して、淨瑠璃といふ物語を、言はゞ立體的に空間的に演奏するやうになつた。これが人形淨瑠璃劇の濫觴だといふことになる。

併しながら、その淨瑠璃界に竹本義太夫があらはれて音楽上の大成を試み、作者近松門左衛門を

得て、戲曲的展開をも試みたのは、元祿時代のことに屬する。爾來二百五十年間、人形淨瑠璃芝居とあれば義太夫節に限るやうになつたのであつたこれは來歴のあらましであるが、淨瑠璃と三味線とによる演奏内容と人形の動作とがピッタリと合致して、三者諧調の美によつて成立する藝術なる點に、先づ御留意ありたい。

次に、人形と人形遣ひのこと。これも歴史的に言ふと、面倒だから、簡単に記す。

人形が手も足もないデクノボーから、肩板が發明され、手、足が生じ、口や眼の開閉や眉の上下が研究され、手の五指が折り屈みをするやうになるまでには、容易ならぬ年月と人知とが費された一個の人形を三人がゝりで、寫實的に遣ふやうになつたのが享保十九年の「蘆屋道滿大内鑑」（葛の葉の狂言）からといふことになつてゐる。今日

から大凡二百年前にあたる。但し、文樂座でもツメ人形（略してツメ）と呼ばれる、ごく下ツ端の役柄のは、一人で一個の人形を遣ふので、原始形式的の人形なのです。

現今、文樂座の座頭と呼ばれる吉田榮三とか、吉田文五郎とかいふ上だつた遣ひ手、實盛なら實盛、お園ならお園の遣ひ手として、番附の上に記載されてゐるのは、「主遣ひ」と呼ばれる主任者で、頭と右手の動作を受け持つ。「左り」と呼ばれて左り手だけを遣ふ人が一人、「足遣ひ」といふ兩足の動作を受け持つのが一人。つまり三人遣ひといふことになる。この三人が主遣ひの呼吸に合せ動作せしめてこそ、統一ある一個の人形として演技するので、これがまたむつかしい。足遣ひだけで十年近くも働らき、それから左りにまはり、やがて主遣ひに進む。

人形淨瑠璃の舞臺——それにも幾變遷があつた慶長以前の傀儡子時代のは、所謂首掛芝居で、一尺巾に二尺か二尺五寸限度の長方形の箱が舞臺であつた。それが次第に擴大されて、明治座の舞臺でも歌舞伎座のでも、何とかして使ふやうになつた。現今の大阪文樂座の舞臺は、間口が六間より少しつまつた程度であるが、それ以前のは、三四間から五間くらゐのものであつたらしい。手遣ひ式でない絲操り式のは、もつと規模が小さかつた。

今の舞臺は、見物席寄りに三尺ほどの幅で、使はない部分がある。これが三の手。それから船底とも呼ばれて床の低くなつてゐるところ、歌舞伎の平舞臺に該當する部分が二の手である。二重舞臺に相當して、屋内に用ひられる、最も奥に位した部分は一の手、または本手といふ。元來は本手といふ本舞臺だけであつたのが、次第に擴大されて二の手三の手と見物席の方へ張り延ばしたから

の名稱である。

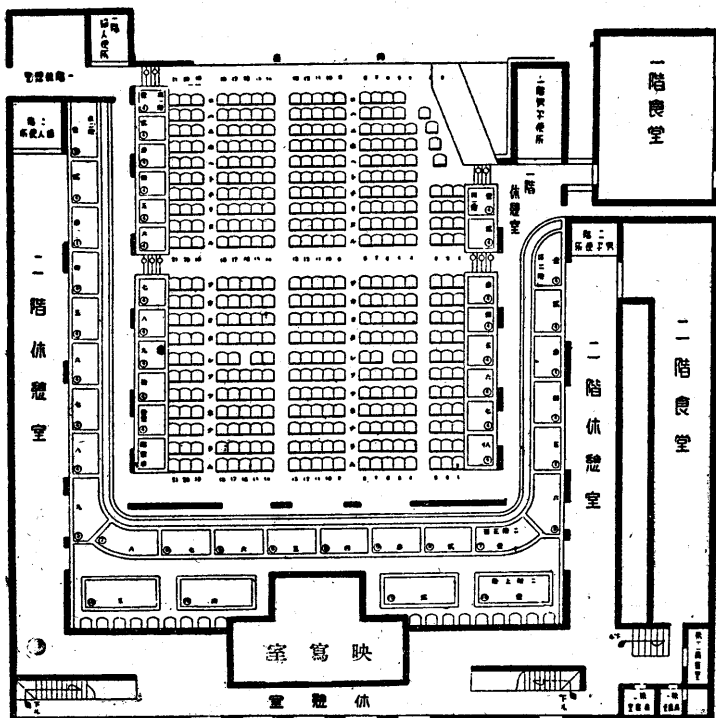
また、太夫と三味線とが、向つて右側へ張り出した床で語り、弾く。即ち横床といふものになつたのも享保年度のこと、義太夫近松頃のは、特別の場合以外は、正面の御簾の内側で語つたのである。人形遣ひも、その頃はからだを現はして使はずに、幕の蔭から人形を差し上げて遣つたもので、「蔭語り蔭遣ひ」と呼ぶ演出形式であつた。

それが次第に「出語り出遣ひ」といふ形式に移行し、結局今日のやうな演出形態になつたのである。それでも、東京興行の場合のやうに、人形遣ひが序幕から切りまで、黒の頭巾をかぶらずに、出遣ひばりといふやうなことは、ごく近年になつての現象です。人形劇として見れば、人形遣ひは頭巾をかぶつてゐるのが本來であること申すまでもありません。

人形芝居といふものは、世界中に分布されてゐます。未開既開の民族を問はず、甚だ廣く、また古く行はれてゐる。けれども、日本のやうに發達したものは、殆ど類例がありません。淨瑠璃といふ音楽は別としても、「假名手本忠臣藏」や「菅原傳授手習鑑」のやうな、大きなスケールの人形劇臺本といふものや、或は三人遣ひの人形で複雑な演出をするが如きものは、嘗てないとされてゐる。

(河竹繁俊氏稿より抜粋)

# 文樂座御劇場席案内



御観覧席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝに好きな處が御自由にとれます御用命のお節お呼出しの電話は

南四七壹壹番で御座ります

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します



# 四月の芝居御案内

| 川湊戸神<br>場劇竹松<br>四〇四四川漢話電                                                     | 條四都京<br>座 南<br>五五一—圖紙話電                                                           | 堀 頓 道<br>座 角<br>二一二二南話電                                                       | 堀 頓 道<br>座 中<br>九七二一—南話電                                                                                        | 阪 大<br>座伎舞歌<br>六二八二戎話電                                                      |
|------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------|
| 日 初 日 一<br>開二 午正 晝<br>演回 時五 夜                                                | 日 初 日 一<br>開二 半時二十晝<br>演回 半 時 五夜                                                  | 日 初 日 一<br>開二 午正 晝<br>演回 時五 夜                                                 | 日 初 日 一<br>開二 午 正晝<br>演部 半時四夜                                                                                   | 日 初 日 一<br>開二 午正 晝<br>演回 時五 夜                                               |
| 鈴<br>聲<br>劇                                                                  | 新<br>興<br>キ<br>ネ<br>マ<br>演<br>藝<br>部<br>創<br>立<br>二<br>周<br>年<br>記<br>念<br>公<br>演 | 新<br>舊<br>合<br>同<br>劇                                                         | 陽<br>春<br>大<br>歌<br>舞<br>伎                                                                                      | 松<br>竹<br>家<br>庭<br>劇                                                       |
| 第 第 第 第<br>四 三 二 一<br>春 生 眞 姫<br>姿 寫 朝 君<br>堅 氣 顔 十<br>し 日 萬<br>ぐ 記 如<br>れ 石 |                                                                                   | 第 第 第<br>三 二 一<br>新 父 夜<br>版 父 話<br>遠 の 陣<br>山 試 男<br>樓 驗 子<br>な<br>れ<br>ば    | 平 義 辰 木<br>經 千 村<br>家 本 長<br>蟹 櫻 門<br>守<br>下 上 茶 紙<br>園 羽 道 子<br>山 根 太 仕<br>の の 間 立<br>櫻 亮 記 兩<br>面 鑑<br>以<br>後 | 第 第 第 第<br>五 四 三 二<br>閨 南 青 母<br>進 春<br>に 丸 温<br>の 息<br>牛 客 泉 親<br>子        |
| 一 二 椅 紅<br>等 等 子 札<br>席 席 場 席<br>一 八 五 三<br>圓 十 十 十<br>(稅 別)<br>錢 錢 錢 錢      | 一 二 三<br>等 等 等<br>席 席 席<br>二 一 六<br>圓 圓 圓<br>(稅 別)<br>圓 圓 錢                       | 特 一 二 三 四<br>等 等 等 等<br>席 席 席 席<br>二 一 一 七 五<br>圓 圓 圓 圓<br>(稅 別)<br>錢 錢 圓 錢 錢 | 特 一 二 三 四 五<br>等 等 等 等 等<br>席 席 席 席 席<br>三 二 一 一 八 五<br>圓 圓 圓 圓 圓<br>(稅 別)<br>錢 錢 錢 錢 錢                         | 一 二 三 菊 櫻<br>等 等 等<br>席 席 席 席<br>二 一 一 八 五<br>圓 圓 圓 圓<br>(稅 別)<br>錢 錢 圓 錢 錢 |

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は 既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐるます。

文樂座人形淨瑠璃は 嘗に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居ります。が尙御氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

御携帶品は 正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雑致しますからお履物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

貴重品は 各自にお持ち下さい。お場席お立ちのときは御携帶願ひます。お煙草は 一階二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

お食事は 西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

賣店は 二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内にて 寫眞撮影は絕對にお斷り致します。

御休憩の間は 一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面入口東側でお渡し致します。

案内人は 胸に番號入マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい、其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願いいたします。

出演者 病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒願ひます。

## ◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として  
案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第參上、どうぞ御利用下さいませ。

専用電話南<sup>75</sup>三七八八番

松竹株式會社

## 文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十六年三月廿一日印刷  
昭和十六年四月一日發行

發行所 松竹株式會社大阪支店

大阪府南區久左衛門町八  
松竹株式會社大阪支店內  
發行所 鳥江鎮也

大阪府西區土佐堀通一丁目十二  
印刷所 永井日英堂印刷所

一部 金二十錢

# 文樂座南一食堂

賜命下御に前幕一は用御の事食御  
すまい座御で利便御極至はれは  
(でま時八らか時五)間時事食御

大坂四ツ橋

## 南温泉料理

御宴會にも  
御家族連にも

電話南⑦⑤

|   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| 一 | 一 | 一 | 一 | 七 |
| 三 | 三 | 三 | 三 | 〇 |
| 三 | 三 | 三 | 三 | 一 |
| 四 | 三 | 二 | 一 | 番 |
| 番 | 番 | 番 | 番 | 番 |

